

垣内松三編『国文選』の特色

一 垣内松三の「国語」教育論と日本型教養

垣内松三は、第四高等学校で西田幾多郎、得能文、藤井乙男、東京帝国大学文科大学で小泉八雲、ケーベル博士の講義を聴いている。特にケーベルを敬慕してその教えから深く学んだ。東京帝大では、高山樗牛の創刊した『帝国文学』を樗牛の弟である斎藤信策らと編集している。

一九一〇（明治四三）年、東京帝大講師、一九一一（明治四四）年、第六臨時教員養成所兼東京女子高等師範学校教授に任ぜられ、一九一九（大正八）年には欧米における女子職業教育、通俗教育、教科書調査のために文部省から約半年間ドイツ、フランス、イギリスに出張した。一九二一（大正一〇）年十一月には、長野県臨時視学委員として中等学校を視察して、その最後に長野師範学校で「国語教

授と国語教育」について講演し、その記録をもとに一九二二（大正一一）年に『国語の力』^{1）}を刊行した。垣内は『国語の力』によってセンテンスメソッドという鑑賞批評理論、形象理論を提唱したことで知られることになった。

『国語の力』の影響力は大きく、その後垣内は全国各地の講師として招かれた。一九二三（大正一二）年には、月刊雑誌『読方と綴方』を創刊する。一九二四（大正一三）年四月創刊の東京帝大国文科編『国語と国文学』には、その巻頭に「文学反響」を寄稿している。垣内が旧制中等学校向け「国語」教科書編纂に乗り出す頃までのおおよその足どりは以上である。彼は青年期に日本型教養を担った人々から学び、教育者となつてのちに西洋の教育事情を視察して、日本の「国語」教育と教養形成に重要な役割を果たしたのである。

武 藤 清 吾

（広島経済大学経済学部准教授）

その後も芦田恵之介との教育実践研究、『独立講座国語教育科学』、『形象論序説』の刊行などで活躍した。二〇世紀後半にも「国語」教科書の編纂にあたり、その後の教科書編集にも影響を与えた。^② 垣内は二〇世紀前半から後半にかけての「国語」教育と青年期教養形成との関係を考察するうえで欠かせない人物である。

二 垣内松三の「国語」読本

垣内の編集した「国語」読本には、中学校用に『国文新選』、『国文新編』、『国文選』、『国語読本』、『高等女学校用に『女子国文新編』、『国文鑑』などがある。また、旧制高等学校や専門学校用国文教科書として『国文学体系 現代文学』をこれらにさきだって編集している。^③ 『国文学体系 現代文学』については野地潤家博士の研究、『国文新選』については橋本暢夫博士の研究がまともっている。^④ それらを参照しながら、これらの教科書と当時の教養や他の読本との関係について考察する。

本稿では、垣内の編集した旧制中学校「国語」教科書『国文選』の特徴を考察して、一九三〇年代前半の「国語」教育がめざしたものを明らかにしていきたい。『国文選』は、『国文学体系 現代文学』、『国文新選』の後継教科書であり、一九三〇年代の教科書に影響を与えている。

三 『国文選』の特色

1 『国文選』の編集方針と各巻の特徴

『国文選』全一〇巻の扉には、次のような緒言が掲げられている。

一 縦に学年を貫き横に学期に亘りて特に全篇の組織に留意せり。

一 文化と国語との関係を基本として国民精神の涵養を意図せり。

一 教材の選択に関しては作品の本質と学習の態度とを考慮せり。

一 原作の更改は教科書としての用意に出づ原作者の諒恕を乞ふ。

『国文選』は、厳選された小説、紀行、評論、古文を主とした読本である。総収録作品一八六編のうち、小説が二九編、紀行文が二七編、評論が四七編である。随筆や小品が一六編、近世文を含む古文が四四編であり、これらが収録作品の大半を占めている。しかも、巻一から巻五には小説や童話、随筆や小品、紀行、評伝が集中しており、巻六から巻十には評論が多数掲載されているという明瞭な特徴

を持っている。

巻一は、中学校一年の前半であることが考慮され、大半が童話、小説、紀行文という読みやすい文章である。特に一課「小さな旅人」(島崎藤村)二課「犬ころ」(二葉亭四迷)、三課「競漕」(久米正雄)、四課「トロッコ」(芥川龍之介)、五課「燕」(鈴木三重吉)と入学直後に学習する一課から五課までになじみやすい童話や小説が収められているのも学習者に対する気配りとなっている。

巻二から巻四も、巻一に続いて、童話、小説、紀行、随筆などの現代文中心の編集である。巻二では、一課「噴煙」(夏目漱石)、八課「非凡なる凡人」(国木田独步)や一〇課「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)という少年小説や童話、五課「トロール船より」(芦田恵之助)、一四課「箱根路」(正岡子規)、という紀行など、他の教科書にも比較的よく採られてきたものが収められている。巻三では、一課の評論「学者の苦心」(芳賀矢一)、三課の小説「山路の茶屋」(夏目漱石)、紀行の「野火止の用水」(国定読本)など、他の教科書でも多く見られる作品が採用されているのは巻二と同様である。一三課の「轡十文字」(菊池寛)は、垣内が『国語の力』刊行に際して学んだ『文芸往来』の筆者、菊池寛の小説である。『国文新選』や『国文学大系 現代文学』にも採られている。

巻二から巻四までには、古文らしいものはほとんどない。表1のように、巻三以降の古文が検定後に現代文に入れ替えられたことを考えると、巻一、二も同様の入れ替えがあったと想像される。ただし、巻四には読みやすい近世の随筆が入れられている。

巻五と巻六は、読み応えのある文章がバランスよく配置されている。巻五では、海外事情を紹介した紀行文が目につく。巻六では、日本型教養の担い手であった和辻哲郎や阿部次郎の紀行や評論、異色の国際派詩人であった野口米次郎の文章、徳富蘇峰の政論、漱石の小説と多彩な文章が並んでいる。

古文は、巻五で太平記、増鏡、平家物語、平治物語、保元物語という軍記物語と近世の雨月物語、擬古文が収められている。巻六では、神皇正統記、道中膝栗毛、徒然草、奥の細道、玉勝間という中世、近世の史論、読物、紀行、随筆が収められている。ともに、巻七以降の本格的な古文学習の準備という位置づけを持たせた編集である。

巻七から巻十までは、上代から現代までの文学史的編成になっている。巻七は、上代と中古の作品が中心になっている。古今東西の学びの姿を描いた一課「昭代の餘恵」(笹川臨風)で始められ、神国思想を背景にした日本文化論である二課「国民文化の理想」(清原貞雄)、祝詞について述

表1 検定後に入れ替えた教材

＊巻一と巻二は、現存確認できるものが初版のみで、再版との比較が無理である。
＊古典教材の重複の整理や、学習時期の考慮、教材のレベルの調整が差し替え理由である。

巻十	巻八	巻七	巻四	巻三	
一五	一六 四	九 五 一四 一六	一七 一八	一五 一六 一七 一八	
人格主義（阿部次郎）	須磨の嵐（紫式部） 家苞くらべ（石原正明）	御国譲り（古事記） 万葉集抄（万葉集） 明・浄・直（続日本紀） 古今和歌集序（紀貫之）	神国（徳富猪一郎） 祈りなほし（吉野拾遺物語）	よぢり不動（宇治拾遺物語） 仁和寺の法師（吉田兼好） 月前の雁（曾我物語） しみのすみか（石川雅望）	検定後に削除された教材
人生の目的（三宅雪嶺）	永遠の恩恵（和辻哲郎） 蘆の若葉（尾上柴舟）	雄大な気魄（伊東忠太） 大和国原（武田祐吉） 西の京（田山花袋） 二つの典型（尾上柴舟）	誠の説（三浦梅園）	野火止め用水 草の匂（薄田泣菫） 撃沈（小笠原長生） 霧（山本有三）	新しく入れられた教材

べた三課「国語の愛護」（五十嵐力）、古事記を論じた四課「牧歌的精神」（和辻哲郎）、出雲大社の歴史を述べた五課「雄大な気魄」（伊東忠太）と続けられている。そして、六課「日本武尊」（古事記）と七課「入鹿の父」（岡本綺堂）の戯曲が収められている。八課以降も評論と紀行の組み合わせで奈良から平安の文化と文学を学ばせるようになっていく。万葉集論の八課「純ぶる心」（佐々木信綱）、九課「大和国原」（武田祐吉）、一二課「聖徳太子」（島地大等）、文化論の二三課「中道を歩む心」（鶴見祐輔）、一五課「平安城」（藤岡作太郎）、古今和歌集と新古今和歌集を比較して論じた一六課「二つの典型」（尾上柴舟）である。紀行文には、一〇課「正倉院拝観記」（藤代祐輔）、一一課「法隆寺」（高浜虚子）、一四課「西の京」（田山花袋）がある。全篇を学ぶことで立体的な上代中古の文化の姿が浮かびあがってくる。

巻八からは古文が多く採用され、中古から中世の文学や文化が扱われている。評論では、上代から中世の軍記物語までの文体を論じた一課「文体の基調」（五十嵐力）に始まり、源氏物語論の四課「永遠の恩恵」（和辻哲郎）、六課「菅原道真」（高山樗牛）、平安文学論の一二課「反省の記録」（土居光知）、新古今和歌集について論じた一六課「蘆の若葉」（尾上柴舟）が収められている。古文は、竹取物語、伊

勢物語、枕草子、大鏡、栄華物語、今昔物語、方丈記、平家物語、平治物語から抄出されている。一〇課の小説「長谷寺」(幸田露伴)と一五課の戯曲「名残の星月夜」(坪内逍遙)は、古文の世界を味わううえで欠かせない現代作品

を織りまぜている。

巻九では、中世から近世にかけての文学と文化が扱われている。評論では、中世から近代までの文学論の一課「文学の新生」(久松潜一)、中世の歴史書を論じた四課「史論

表2 収録小説一覧

*『』は、文末に記された出典名である。

<p>巻一 島崎藤村「小さな旅人」『をきなものごと』 二葉亭四迷「犬ころ」『平凡』 久米正雄「競漕」『学生時代』 芥川龍之介「トロッコ」『春服』 鈴木三重吉「燕」『小鳥の巣』 長塚節「蛙」『土』 下位春吉「至急電報」『大戦中のイタリア』 加藤武雄「墨痕」『加藤武雄の文』 泉鏡花「苺」『泉鏡花の文』 徳富蘆花「將軍」『徳富蘆花の文』 永井荷風「リヨンの郊外」『新編ふらんす物語』 夏目漱石「噴煙」『漱石全集』 志賀直哉「山の本と大鋸」『白樺の森』 国木田独步「非凡なる凡人」『独歩全集』 渋川玄耳「国引」『古事記噺』 芥川龍之介「蜘蛛の糸」「傀儡師」</p>	<p>巻二</p>
<p>巻三 夏目漱石「山路の茶屋」『漱石全集』 久米正雄「銃」『久米正雄の文』 森鷗外「木精」『鷗外全集』 菊池寛「轡十文字」『菊池寛の文』 夏目漱石「槌の響」『漱石全集』 芥川龍之介「杜子春」『沙羅の花』 吉江喬松「角笛の声」『吉江喬松の文』 夏目漱石「京の春」『漱石全集』 相馬御風「草蛙の紐」『相馬御風の文』 尾崎紅葉「塩原」『金色夜叉』 山本有三「心の置処」『途上』 夏目漱石「倫敦塔」『漱石全集』 幸田露伴「長谷寺」『二日物語』 夏目漱石「山路」『草枕』 森鷗外「高瀬舟」『鷗外全集』</p>	<p>巻三 巻四 巻五 巻六 巻七 巻八 巻十</p>

三書」(清原貞雄)、一二課「謡曲の本質」(五十嵐力)、芭蕉以前の俳諧を論じた一六課「俳諧の変遷」(佐々政一)、人物伝と文化論の六課「愚禿親鸞」(西田幾多郎)、八課「北畠親房」(田中叢成)、一五課「永徳と山樂」(中井宗太郎)が組みあわせられている。古文は、吾妻鏡、増鏡、東関紀行、十訓抄、太平記、徒然草の各抄出と謡曲「鉢木」、狂言「入間川」である。

巻十は、近世から近代までを視野に置いている。評論では、芭蕉など江戸元禄期の人物伝と文学論である一課「元禄文壇の三偉人」(藤井乙男)、近代史劇の発生を考察した九課「史劇について」(坪内逍遙)、政論の一〇課「ハンニバル」

（矢野龍溪）、近代詩の生成を論じた一一課「新しい詩の生誕」（高須芳次郎）、フランスから近世思想を見つめた随想風の評論である一四課「春を待ちつゝ」（島崎藤村）、西洋文化を視野に入れた人生論の一五課「人生の目的」（三宅雪嶺）、近代工業社会における文化のあり方を論じた一六課「文化の威力」（得能文）で全一〇巻が締めくくられている。また小説として漱石「草枕」と鷗外「高瀬舟」が収められ

表3 各巻の文種別収録数

計	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	巻
31	2		1		1	4	3	4	5	11	小説
16					1	2	4	4	2	3	随筆
27				3	1	3	3	8	3	6	紀行文
7							2	2	3		伝記
5			1	1	1		1		1		戯曲
2									1	1	説明文
1										1	報告文
											書簡文
6					1	1	1	1	1	1	童話
47	7	7	5	11	7		5	2	3		詩
44	7	9	9	1	5	9	2		2		評論
											古文
186	16	16	16	16	17	19	21	21	21	23	計

ている。

また、緒言で掲げた「国民精神の涵養」に傾斜した作品はそれほど多くはない。教授要目と教科書検定に対する配慮として、この文言を掲げ、政論や国体論を評論に数篇入れ、文末に「詔書」や「勅語」を収めている。しかし、問題は収めた文章の数ではない。「国民精神の涵養」という文言を入れ、帝国体制下においての自己の内面形成に「国語」教育論の目的をおいたことで、他者との共同の可能性を見失い、自閉する「国語」教育論を展開せざるを得なくなっていたことは確認しておく必要がある。

2 文種別収録作品と学習指導への配慮

小説と童話

収録された小説と童話は三〇篇であり、他の読本に比較すると厳選されていることがわかる。

漱石、鷗外、龍之介の作品に加え、近代文学史上の重要な作家の代表作の抄出が目立つ。たとえば、漱石は四篇採られており、巻二の二課「噴煙」、巻三の三課「山路の茶屋」、巻四の二課「槌の響」、巻五の二課「京の春」、巻十の二課「山路」は『草枕』『二百十日』、『虞美人草』、『草枕』の著名な各章を抄出している。漱石は、このほかにも巻六に二課「倫敦塔」の短編も収められ、五作品の収録という

扱いである。

龍之介は、巻二に童話の一〇課「蜘蛛の糸」、巻四に一九課「杜子春」と巻一に少年小説の四課「トロッコ」の三篇、鷗外は巻三に一一課「木精」、巻十に一二課「高瀬舟」の二篇である。それぞれの作家の個性がよく浮かびあがる収録である。

また、巻一では、一課「小さな旅人」（島崎藤村）は『をさなものがたり』、二課「犬ころ」（二葉亭四迷）は『平凡』、五課「燕」（鈴木三重吉）は『小鳥の巣』、九課「蛙」（長塚節）は『土』、一九課「將軍」（徳富蘆花）は『不如帰』、二〇課「リヨンの郊外」（永井荷風）は『新編ふらんす物語』と、それぞれの作家の代表作が採用されている。巻二以降でも、巻二の八課「非凡なる凡人」（国木田独步）は同名小説、巻五の四課「草蛙の紐」（相馬御風）は『大愚良寛』、一二課「塩原」（尾崎紅葉）は『金色夜叉』、巻八の一〇課「長谷寺」（幸田露伴）は『二日物語』など、同様にそれぞれの作家の代表作が収録された。

さらに、龍之介と第四次「新思潮」の同人となった久米正雄、菊池寛、山本有三の小説も収められている。久米は、彼の代表作である巻一の三課「競漕」と巻三の七課「銃」、寛は巻三の二三課「轡十文字」、有三は巻五の一七課「心の置処」（『途上』）がある。

このほか、巻一に二三課「至急電報」（下位春吉）、一四課「墨痕」（加藤武雄）、一七課「苺」（泉鏡花）、巻二に七課「山の木と大鋸」（志賀直哉）、九課「国引」（渋川玄耳）、巻四に二〇課「角笛の声」（吉江喬松）が収められている。

戯曲

戯曲については、巻二の一二課「桜井駅」（松居松翁）、巻四の二二課「亡兆」（菊池寛）、巻六の一七課「長柄川堤の訣別」、巻八の一五課「名残の星月夜」（坪内逍遙）、巻七の七課「入鹿の父」（岡本綺堂）という文学史的な評価が高い劇作家のものに限られている。

全五作の戯曲のうち逍遙門下の松居松翁と逍遙が三作を占めており、小山内薫らの自由劇場系列を入れていない。松居松翁の「桜井駅」は、楠木正成・正行親子の別れと湊川での足利尊氏との戦闘が伝えられる「桜井の別れ」をもとにした戯曲である。忠臣、報国のエピソードとして語られてきた内容である。逍遙の「長柄川堤の訣別」は「桐一葉」から、「名残の星月夜」は同名戯曲からの抄出である。逍遙がシェークスピア劇に学び、確立した代表的な史劇である。綺堂の「入鹿の父」も著名な史劇である。仏教の加護を背景に権勢を振るった蘇我蝦夷と入鹿親子の滅亡を描いている。寛の「亡兆」は高麗狗を盗む盗賊を描いた戯曲

である。

わずかな戯曲であるが、日本の伝統的な題材をもとにした史劇を集めている。そのため、小山内薫系列以外の重要な作家を収めることになったと見てよい。

評論

評論では、巻四の一五課「樹の根」(和辻哲郎)、巻六の一四課「読書と体験」(阿部次郎)、巻七の四課「牧歌的精神」(和辻哲郎)、巻八の四課「永遠の恩恵」(和辻哲郎)、一二課「反省の記録」(土居光知)、巻九の六課「愚禿親鸞」(西田幾多郎)など日本型教養の担い手たちの評論が多く採用されている。和辻の「樹の根」は『偶像再興』、「牧歌的精神」は『日本古代文化』、阿部の「読書と体験」は『人格主義』、土居の「反省の記録」は『文学序説』、西田の「愚禿親鸞」は『思索と経験』と、それぞれの代表作からの抄出である。和辻の文章が多く採られていることがわかる。

また、国語、国文学者の代表的な論考を集めている点でも特徴がある。巻三の一課「学者の苦心」(芳賀矢一)、巻七の三課「国語の愛護」(五十嵐力)、一五課「平安城」(藤岡作太郎)、巻八の一課「文体の基調」(五十嵐力) 巻九の一課「文学の新生」(久松潜一)、巻九の四課「史論三書」(清原貞雄)、巻十の一課「元禄文壇の三偉人」(藤井乙男)と多くの国語学者の評論が採られている。また、巻二の一

九課「否の一語」(西洋節用論)(中村正直)、巻六の七課「俚諺論」(大西祝)、一三課「物と名との境」(丘浅次郎)という文章や語に関する評論もあわせて収録されて、文章論の原理論や実践論という多様な読みを求めた内容である。

なかでも、たとえば、近世文学論の「文学の新生」(久松潜一)、「俳諧の変遷」(佐々政一)、「元禄文壇の三偉人」(藤井乙男)など、国語論や各時代の文学背景を述べた論考など専門性の高い内容の論考が並べられている。

文化に関する評論も多い。海軍での無線電信の開始を述べた巻二の六課「無線電信」(木村駿吉)、巻四の七課「練馬の名画」(饗庭篁村)、九課「障子の国」(鶴見祐輔)、茶道を論じた巻六の九課「茶境」(奥田正造)、巻九の一二課「謡曲の本質」(五十嵐力)、巻十の九課「史劇について」(坪内逍遙)と各文化分野の歴史を描いている。

文化の歴史に関しては、巻七の五課「雄大な気魄」(伊東忠太)、九課「大和国原」(武田祐吉)がある。紀行文として書かれたものとあわせて、日本文化の歴史をバランスよく収めている。

さらに、学問や文化の摂取を述べた巻七の一課「昭代の餘恵」(笹川臨風)、二課「国民文化の理想」(清原貞雄)、一三課「中道を歩む心」(鶴見祐輔)という日本文化論に加え、巻十の一四課「春を待ちつ、」(島崎藤村)はフランス

滞在時の日本文化への思いを述べた評論である。全一〇巻の巻末が一六課「文化の威力」(得能文)であるのも『国語の力』の巻末が「文化の創造」であることの符号が見られ興味深い。

俳論、歌論、詩論としては、巻三の一二課「廃れたる園(歌評)」(若山牧水)、巻四の八課「川柳点」(金子元臣)、一二課「椿落ちて(句評)」(荻原井泉水)、万葉集論の巻七の八課「純ぶる心」(佐々木信綱)、古今集と新古今集を論じている巻七の一六課「二つの典型」(尾上柴舟)、巻八の一六課「蘆の若葉」(尾上柴舟)、『俳諧史』の抄出である巻九の一六課「俳諧の変遷」(佐々政一)、『日本現代文学十二講』の抄出である巻十の一一課「新しい詩の生誕」(高須芳次郎)がある。

人物と文化に関するさまざまな評論も収めている。巻六の八課「白楽天」(野口米次郎)、一六課「世界の四聖」(高山樗牛)、巻七の一二課「聖徳太子」(島地大等)、巻八の六課「菅原道真」(高山樗牛)、巻九の八課「北畠親房」(田中叢成)、一五課「永徳と山樂」(中井宗太郎)とそれぞれの時代に生きた人物を取りあげて、その時代の特徴を浮かびあがらせている。

低学年向けには、評論というほどのものではないが、時代と人物を考えさせる評伝・伝記が適宜配置されている。

上級学年の学びとの連続性を持たせており興味深い。巻二の一一課「マンブリノの兜(翻訳)」(片上伸訳)、一六課「普請奉行」(絵本太閤記)、一八課「伊能忠敬」(幸田露伴)、巻三の六課「灯を消して」(桜井忠温)、一四課「近江聖人」(橘南谿)『東遊記』、巻四の二課「燈火」(佐々木信綱)、一六課「日蓮上人」(高山樗牛)を収めている。

政論や国体論、臣民論などには、臣民論の巻二の二〇課「覚悟」(嘉納治五郎)、国体を論じた巻四の一七課「神国」(徳富猪一郎)、『大戦後の世界と日本』より抄出した巻六の一五課「大死一番」(徳富蘇峰)、『戦時彙報』より抄出した英雄論の巻十の一〇課「ハンニバル」(矢野龍溪)、国体と日本人の生き方を論じた一五課「人生の目的」(三宅雪嶺)などがある。これらは、「緒言」の二項目で「文化と国語との関係を基本として国民精神の涵養を意図せり」とした「国民精神の涵養」を目的とした論考とみてよい。こうした教材の収録が自閉する「国語」教育論へと傾斜していった要因になったことは『国文選』の編集方針で見たとおりである。

随筆と紀行

随筆では、評論の巻三の一課「学者の苦心」(芳賀矢一)にならんで、『飯倉だより』からの抄出である巻五の一課「文章の道」(島崎藤村)が『国文新選』と同様に中学年の学び

の中心に据えられている。言葉と文章について、読むこと、書くことの両面からの追求があり、さらに先に見た文章や語に関する評論へと学習の系統性が図られている。

巻一の一五課「凌霄花」(吉村冬彦)、巻二の二課「森の絵」(吉村冬彦)は冬彦の『藪柑子集』からの文章である。冬彦のものは、このほか巻四の四課「先生への通信」(吉村冬彦)、巻六の二課「自画像」(吉村冬彦)があり、特徴的である。

巻三の五課「蓮」(豊島与志雄)、一八課「蚕」(山本有三)、二二課「小園の記」(正岡子規)、巻四の一〇課「鎮守の森」(笹川臨風)、巻五の一九課「月雪花」(芳賀矢二)など自然を描いた叙景文も多い。また、巻二の二三課「湘南雑筆」(徳富蘆花)は『自然と人生』からの抄出である。

このほか、巻三の一七課「撃滅」(小笠原長生)や巻四の三課「父の思ひ出」(里見弴)は、時代と人生を考えさせる随筆である。

これらの叙景文や叙事文に加え、紀行文が多数採用されているのも『国文選』の特徴である。巻一の七課「静寂」(高浜虚子)、八課「新緑」(荻原井泉水)、一六課「千里の春」(大和田建樹)、二二課「仏浜の月夜」(大町桂月)、巻二の三課「伊勢参宮」(五十嵐力)、一四課「箱根路」(正岡子規)、巻三の二課「花影の中に」(田山花袋)、八課「孤島

より」(窪田空穂)、一〇課「海の旅」(島崎藤村)、一五課「野火止の用水」(国定読本)、一六課「草の匂」(薄田泣菫)、二〇課「田園観興」(大町桂月)、巻四の一四課「雪前雪後」(幸田露伴)、巻四の六課「松下村塾を訪ふ」(下村海南)がある。こうした国内の紀行文だけでなく、巻一の一課「新高山」(田村剛)、一二課「国境に立ちて」(フレック・トリップ、北原白秋訳)、巻三の九課「長江湖江記」(遅塚麗水)、巻五の七課「鷺江の月明」(佐藤春夫)、一〇課「南欧の空」(吉江喬松)、一八課「米国の半面」(厨川白村)など海外各地の紀行文も収めている。

紀行文のなかでも、巻六の二課「法隆寺の印象」(和辻哲郎)、巻七の一〇課「正倉院拝観記」(藤代祐輔)、一一課「法隆寺」(高浜虚子)、一四課「西の京」(田山花袋)などは、古文学学習の便宜が図られている。

巻二の五課「トロール船より」(芦田恵之助)は垣内が「国語」教育実践の同志としてきた芦田の『第二読み方教授』からの抄出である。他の「国語」読本にはほとんど見られない。

小品や説明文には、巻一の一〇課「小話三題」(薄田泣菫)、二三課「小品三章」(落合直文)、二二課「雲のいろく」(幸田露伴)、巻二の四課「海浜の草」(柳田国男)、巻三の一九課「小品二題」(町外れ)国木田独歩、「漁村の秋」北

原白秋)がある。独歩は『武蔵野』、白秋は『童心』からの抄出である。

これらの傾向は西尾実が中心になって編集した岩波編集部編『国語』⁵⁾も同様である。これに関連して芭蕉の文章は、本文では「奥の細道」、「幻住庵の記」の二篇、俳句は各文末に二句ある程度である。『国語』で芭蕉の本文と彼に関する論考を大量に採用したのとは対照的である。

韻文

韻文では、巻四の五課「小諸なる古城のほとり」(島崎藤村)、巻五の三課「汽車に乗りて」(上田敏)、巻六の四課「出盧」(土井晩翠)という近代詩史に欠かせない典型の詩が収められている。これらの本格的な詩に入る前に、巻一の六課「詩二篇」(島木赤彦)の童謡、巻二の一五課「幼き日」(柳沢健)、巻三の四課「詩二篇」の「風景」(百田宗治)、「小景」(千家元麿)という読みやすくなりやすい詩を収めて、初学者への配慮をしている。

また、俳句、短歌は課として独立させず、のちに見るように、各収録文と関係するものが各文章末に多数添えられている。これも他の読本に比較すると圧倒的な文章量であり、他の教科書でここまで徹底しているのは珍しい。『国語』はこの方針を積極的に受け継いでいる。

学習指導への配慮

学習指導の配慮としては、各頁下段に学習の手引きとしての「着眼点」が添えられているのが目につく。たとえば、巻一の冒頭教材である「小さな旅人」(島崎藤村)には、着眼点として「読む」といふ心の力が掲げられ、本文が「読む」ことに関する文章であることに着目できるように配慮されている。そして、文中の「精神の旅」、「読まうとさえ思へば」、「書籍の墓地」、「活きかへり活きかへりする」という重要語句が示されている。『国文選』全篇でこのような文意を把握する着眼点と語彙、文章を学ぶポイントが提示されているのである。また、各巻末には語釈、語彙、辞書一覧、国文学形態史図表、国文学年表が付録としてつけられている。

このように『国文選』は、作品を読むことのみを主目的とした教科書ではなくなっていることがわかる。作品を読むことから語彙や文章の学びを深め、さらに自主的な学びへと進む学習者像を描いていたのである。この背景には彼のセンテンスメソッドという方法論がある。そうした彼の立場は書名にもよく現れている。垣内の編集した「国語」教科書の名称が、『国文新選』、『国文選』、『国語読本』、『女子国文新編』、『国文鑑』と「読本」の名を持つのはわずかに一つしかない。一九三四(昭和九)年に刊行され全国の大半の中学校で使用された岩波編集部編『国語』が単独の

科目名称を掲げる教科書として現れるあいだを繋いでいるのである。

垣内は『国語教材論』で「国語読本の編纂は決して雑纂ではなくして、一種の創作である」と述べている。彼はこうした立場からすでに『国文新選』で「ことばの生活」とことばの文化を基底に据え、学習者の発達に即し、季節とも照応させた編成⁶をとっていた。教材配置も「雑纂的国語読本を超克」するために「有機的な統合体」とする意図的な編集を行っていた。これは、芥川龍之介や菊池寛にとつて読本を編集するという作業が文芸実践として行われたことと共通している。また、鈴木三重吉の『赤い鳥』が単なる編集ではなく創作実践であったことも同様である。

多彩な添え文

『国文選』には、各文章末の余白に添え文としての短文が多く収められている。「国語」教科書では、編集の際に余白が生じてそのままにすることが多い。また、埋め草としてわずかに短文を添えることもあるが、『国文選』の場合は明確な編集方針のもとに必要な文章が添えられている。これを「埋め草」と呼ぶのはふさわしくなく、本稿では「添え文」と表記しておきたい。余白に短文を添えているというよりも、本文を読み深めていくための参考文献と理解でききる。

表7、8のように韻文では、俳句二三人、和歌、長歌四人、短歌二五人、詩三人、川柳一人という多くの短文が収められている。格言や俚諺も七種ある。また、古文が三一篇、現代文が二二篇、漢文が三篇、その他の文章が四篇である。これらが、本文との関係を考慮されながら添えられており、授業では、その関連を見ながら読むこともあったと思われる。これも、学習指導の工夫の一つとして興味深い。

四 『国文選』の「国語」教育史上の意義

「国語」読本が『国文新選』から『国文選』、『国語』へと推移した一〇年間は、「国語」教育目標が大きく動いた時期であることが、こうした「国語」教材史からも見ることができ。文芸研究、文章研究の深まりを受けて「国語」教科書が「雑纂」的な編集から「創作」的編集になってきた。その背景には、「国語」教科書に盛り込む教材が単なる文章から文化的な価値を持った教養的な文章であるという理解が進んだことをあげることができる。ここには、文芸実践の分野での、龍之介や寛の営為に学ぶ「国語」教育実践の姿がある。

『国文選』は一九三〇年代の「国語」教科書に影響を与えていく。特に、西尾実が中心となって編集した『国語』

との類似性は明らかである。現代文重視の編集方針は言うまでもなく、随筆の紀行と叙景の扱い、評論の日本型教養の担い手の大量採用、古文での文学史的配置など、今日の教科書にまで、その影響が及んでいるとも言えるのである。

注

(1) 『国語の力』不老閣書房、一九二二年五月。随筆的論文集『石叫ばむ』(不老閣書房、一九一九年七月)に続く二冊目の著作である。本稿では、復刊『国語の力』(有朋堂、一九五三年八月)を参照している。

(2) 石井庄司編著『国語教育叢書19 近代国語教育論史』(教育出版センター、一九八三年二月)、石井庄司「垣内松三」、唐沢富太郎編著『図説 教育人物事典』ぎょうせい、一九八四年四月。

(3) 『国文新選』(野村八良、斎藤清衛、平林治徳、鈴木敏也との共著、一九二五年一月訂正、明治書院、『国文新編』(一九二七年二月訂正、明治書院)、『国文選』(一九三〇年一月訂正再版、明治書院)、『国語読本』(古城貞吉との共著、一九三二年八月訂正再版、六星館)、『女子国文新編』(一九三五年二月訂正再版、文学社)、『国文鑑』(一九二七年一月訂正再版)、『国文学大系 現代文学』(一九二一年九月初版、尚文堂)

(4) 野地潤家『野地潤家著作選集 第一一巻 垣内松三研究―「国語の力」を中心に―』(明治図書、一九九八年二月)。関連論考「『国語の力』の成立過程 その一二―何を如何に読むかを中心に―」の初出は広島大学教育学部国語科光

葉会『国語教育研究』(21)。橋本暢夫『中等学校国語科教材史研究』(溪水社、二〇〇二年七月)。関連論考「垣内松三編『国文新選』の教材化の特色とその史的役割」の初出は、『大分大学教育学部研究紀要』9巻第2号及び『国語科教育』第35集。

(5) 岩波編集部編『国語』(岩波書店、一九三四年八月五月初版。全十巻。訂正再版同年十二月、同年十二月文部省検定済。改訂版は、一九三八年七月四日初版、十二月訂正再版発行、一二月文部省検定済)。

(6) 橋本暢夫『中等学校国語教材史研究』(二〇〇二年七月、溪水社、四九二頁)。

*本研究は平成一九・二〇年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号19530845「大正、昭和前期における国語教科書と教養形成に関する研究」)の研究助成を受けている。

表4 垣内松三編『国文選』目次

表4 垣内松三編『国文選』目次		
巻一		
一	童話	小さな旅人 (をさなものがたり) 島崎藤村 四
二	小説	犬ころ (平凡) 二葉亭四迷 八
三	小説	競漕 (学生時代) 久米正雄 二〇
四	小説	トロッコ (春服) 芥川龍之介 二九
五	小説	燕 (小鳥の巣) 鈴木三重吉 四四
六	童謡	詩二篇 (赤彦童謡集) 島木赤彦 五四
	(一) 石工 (二) 土掘れ	
七	紀行	静寂 (叡山譜) 高浜虚子 五七
八	紀行	新緑 (観音巡礼) 荻原井泉水 六八
九	小説	蛙 (土) 長塚節 六一
一〇	小品	小話三題 (猫の微笑) 薄田泣菫 七五
	(一) 命令法 (二) 扉の一語 (三) 衝突予防法	
一一	紀行	新高山 (田村剛の文) 田村剛 八一
一二	紀行	国境に立ちて (フレップ・トリップ) 北原白秋 九四
一三	小説	至急電報 (大戦中のイタリア) 下位春吉 一〇六
一四	小説	墨痕 (加藤武雄の文) 加藤武雄 一二三
一五	随筆	凌霄花 (菽柑子集) 吉村冬彦 一二七
一六	紀行	千里の春 (雪月花) 大和田建樹 一三三
一七	小説	苺 (泉鏡花の文) 泉鏡花 一三九
巻二		
一	小説	噴煙 (漱石全集) 夏目漱石 四
二	随筆	森の絵 (菽柑子集) 吉村冬彦 一七
三	紀行	伊勢参宮 (我が書翰) 五十嵐力 二四
四	説明	海浜の草 (柳田国男の文) 柳田国男 二九
*各課文末の添え文		
一	島崎藤村の文	三 新緑の庭 (芥川龍之介) 四 尾上柴舟、尾山
葛二郎の短歌各一首	八 俳句三句	子規、碧梧桐、井泉水 九 長塚
節の短歌三首	一〇 薄田泣菫の詩	一一 柳田国男の文「沖縄の自然
色」	一二 北原白秋の詩	一四 「追憶 (一) 石川啄木の短歌四首 一
五 「追憶 (二) 土岐哀果の短歌二首	文章論 (無署名)	一六 虚
子、鳴雪、子規の俳句各一句	一八 格言二文	一九 河合醉茗の詩 二
〇 吉江孤雁「旅信」	二二 窪田空穂、松村英一、若山牧水の短歌各	
一首		

五	紀行	トロール船より	
		〔第二読方教授〕の文	芦田恵之助
六	評論	無線電信	三四
		〔その頃を語る〕の文	木村駿吉
七	小説	山の木と大鋸	四二
		〔白樺の森〕	志賀直哉
八	小説	非凡なる凡人	五〇
		〔独歩全集〕	国木田独歩
九	神話	国引	六〇
		〔古事記〕	淡川玄耳
一〇	童話	蜘蛛の糸	八三
		〔傀儡師〕	芥川龍之介
一一	評伝	マンブリノーの呪	八六
		〔翻訳〕	
		〔片上伸の訳文〕	片上伸
一二	戯曲	桜井駅	九七
		〔松居松翁の文〕	松居松翁
一三	随筆	湘南雑筆	一〇七
		〔自然と人生〕	徳富蘆花
一四	紀行	箱根路	一九
		〔子規全集〕	正岡子規
一五	詩	幼き日	一三四
		〔柳沢健の詩〕	柳沢健
一六	評伝	普請奉行	一四一
		〔絵本太閤記〕	
一七	近世	鬼作左	一四二
		〔藩翰譜〕	新井白石
一八	評伝	伊能忠敬	一五二
		〔幸田露伴の文〕	幸田露伴
一九	評論	否の一語	一六一
		〔西洋節用論〕	中村正直
二〇	評論	覚悟	一六八
		〔国土〕	嘉納治五郎
二一	古文	一寸法師	一七一
		〔御伽草子〕	
二二	詔書		一七七
	語釈		一八四

卷三

*各課文末の添え文

一	漱石の俳句三句	二	前田夕暮、大田水穂の短歌各一首	三	明治
	天皇御製	五	木下利玄、石樽千亦の短歌各一首	七	俚諺
	記抄	沼波珪音	一二	落合直文の短歌各一首	文章論
					〔無署名〕
三	斎藤茂吉、中村憲吉、島木赤彦の短歌各一首	一四	子規、伊藤左		
	千夫、長塚節の短歌各一首	一六	豊臣秀吉、蒲生氏郷、伊達政宗の短		
	歌各一首	一七	格言	一八	「学問の道」
			貝原益軒	一九	西郷南洲
	の文	二〇	徳川家康の文	二一	イソップ物語

一	評論	学者の苦心	
		〔大日本国語辞典〕の序文	芳賀矢一
二	紀行	花影の中に	四
		〔花袋紀行集〕	田山花袋
三	小説	山路の茶屋	夏目漱石
		〔漱石全集〕	
四	詩	詩二篇	三二
		〔一〕風景	百田宗治
		〔二〕小景	千家元麿
五	随筆	蓮	豊島与志雄
		〔豊島与志雄の文〕	
六	評伝	灯を消して	桜井忠温
		〔將軍之木〕	
七	小説	銃	久米正雄
		〔久米正雄の文〕	
八	紀行	孤島より	窪田空穂
		〔旅人〕	
九	紀行	長江湖江記	遅塚麗水
		〔新入蜀記〕	
一〇	紀行	海の旅	島崎藤村
		〔海へ〕	
一一	小説	木精	森鷗外
		〔鷗外全集〕	
一二	評論	廃れたる園	一〇五
		〔若山牧水の文〕	若山牧水

卷四

三	小説	轡十文字 (菊池寛の文)	菊池寛	一二四
四	評伝	近江聖人 (東遊記)	橘南谿	一三四
一五	紀行	野火止の用水 (国定読本)		一四一
一六	紀行	草の句 (薄田泣菫の文)	薄田泣菫	一四五
一七	随筆	撃滅 (小笠原長生の文)	小笠原長生	一五二
一八	随筆	蚕 (山本有三の文)	山本有三	一五七
一九	紀行	小品二題		一六一
		(一) 町外れ (武蔵野)	国木田独歩	
		(二) 漁村の秋 (童心)	北原白秋	
二〇	紀行	田園觀興 (桂月全集)	大町桂月	一六七
二一	随筆	小園の記 (子規全集)	正岡子規	一七五
		*各課文末の添え文		
一	新渡戸稲造の文	五 与謝野寛・晶子の短歌各一首	格言	八
	窪田空穂の短歌二首	九 白帝城 李白 一〇 晋風の俳句一句		一二
	若山牧水の短歌一首	一四 中江藤樹の文 二六 俚諺 一七 山鹿素		
	行の文 二〇 大町桂月の短歌一首			

六	紀行	松下村塾を訪ふ (下村海南の文)	下村海南	三八
七	評論	練馬の名画 (饗庭篁村の文)	饗庭篁村	四五
八	評論	川柳点 (金子元臣の文)	金子元臣	五三
九	評論	障子の国 (鶴見祐輔の文)	鶴見祐輔	五九
一〇	随筆	鎮守の森 (笹川臨風の文)	笹川臨風	六五
一一	随筆	四季の雨 (花月草紙)	松平定信	七〇
一二	評論	椿落ちて (句評) (荻原井泉水の文)	荻原井泉水	七五
一三	近世	露の世 (おらが春)	小林一茶	八二
一四	紀行	雪前雪後 (洗心録)	幸田露伴	八七
一五	評論	樹の根 (偶像再興)	和辻哲郎	九三
一六	評伝	日蓮上人 (樗牛全集)	高山樗牛	一〇二
一七	評論	神国 (徳富猪一郎の文)	徳富猪一郎	一〇九
一八	近世	誠の説 (梅園叢書)	三浦梅園	一一八
一九	童話	杜子春 (沙羅の花)	芥川龍之介	一二二
二〇	歴史	角笛の声 (吉江喬松の文)	吉江喬松	一五五
二二	戯曲	亡兆 (菊池寛の文)	菊池寛	一六七
二三	語釈	勅語		一八二
		*各課文末の添え文		
一	青々、月斗、則天楼の俳句各一句	三 俚諺 四 加納諸平、佐久		

良東雄、平野国臣、佐久間象山、久坂玄瑞、野村望東尼の短歌各一首七
 橋南谿の文 八 川柳五句 一〇 大町桂月の文 一二 蕪村の俳句一
 句 一三 一茶の俳句三句 一四 芳賀矢一の文 一七 大島正徳の文

卷五

- | | | | | |
|----|----|----------------|------|----|
| 一 | 随筆 | 文章の道（飯倉だより） | 島崎藤村 | 四 |
| 二 | 小説 | 京の春（漱石全集） | 夏目漱石 | 一〇 |
| 三 | 詩 | 汽車に乗りて（上田敏詩集） | 上田敏 | 一五 |
| 四 | 小説 | 草蛙の紐（相馬御風の文） | 相馬御風 | 二九 |
| 五 | 古文 | 熊野落（太平記） | | 五〇 |
| 六 | 古文 | おどろのした（増鏡） | | 五八 |
| 七 | 紀行 | 鷺江の月明（南方紀行の文） | 佐藤春夫 | 六八 |
| 八 | 古文 | 故郷の花（平家物語） | | 七五 |
| 九 | 古文 | 鴨遊（源平盛衰記） | | 七九 |
| 一〇 | 紀行 | 南欧の空（吉江喬松の文） | 吉江喬松 | 八七 |
| 一一 | 古文 | 有王島下り（平家物語） | | 九八 |
| 一二 | 小説 | 塩原（紅葉全集） | 尾崎紅葉 | 一〇 |
| 一三 | 古文 | 公卿会議（平治物語） | | 一六 |
| 一四 | 古文 | 鎮西八郎（保元物語） | | 二四 |
| 一五 | 近世 | 白峰の陵（雨月物語） | 上田秋成 | 三二 |
| 一六 | 近世 | 擬古文抄（曇る夜の月を見る） | 村田春海 | 三八 |

（二）蓮を見る（うけらが花）加藤千蔭

（三）蚊遣火（檀園文集）中島広足

一七 小説 心の置処（途上）山本有三 一四二

一八 紀行 米国の半面（印象記）厨川白村 一四七

一九 随筆 月雪花（月雪花）芳賀矢一 一五二

語彙・枕詞・形容詞・動詞・副詞・辞書一覽

*各課文末の添え文

一 加藤千蔭、村田春海の短歌各一首 二 香川景樹の短歌一首 四

良寛、平賀元義、橘曙覧の短歌各一首 一二 紅葉の俳句一句 一四 保

元物語 一六 六樹園飯盛「鐘〇の賛」一七 村田春海の短歌一首 一

八 厨川白村の文

卷六

- | | | | | |
|----|----|----------------|-------|----|
| 一 | 小説 | 倫敦塔（漱石全集） | 夏目漱石 | 四 |
| 二 | 紀行 | 法隆寺の印象（和辻哲郎の文） | 和辻哲郎 | 一四 |
| 三 | 近世 | 京見物（道中膝栗毛） | 十返舎一九 | 二七 |
| 四 | 詩 | 出盧（天地有情） | 土井晩翠 | 三八 |
| 五 | 古文 | 人臣の道（神皇正統記） | 北畠親房 | 四三 |
| 六 | 古文 | 徒然草十題（徒然草） | 吉田兼好 | 四八 |
| 七 | 評論 | 俚諺論（大西博士全集） | 大西祝 | 五六 |
| 八 | 評論 | 白樂天（野口米次郎の文） | 野口米次郎 | 六二 |
| 九 | 評論 | 茶境（茶味） | 奥田正造 | 六七 |
| 一〇 | 近世 | 奥の細道（奥の細道） | 松尾芭蕉 | 七三 |
| 一一 | 随筆 | 自画像（吉村冬彦の文） | 吉村冬彦 | 八五 |

二	近世	玉かつま抄 (玉かつま)	本居宣長	九五
一三	評論	物と名との境		
一四	評論	(丘浅次郎の文) 丘浅次郎	一〇一	
一五	評論	読書と体験 (人格主義) 阿部次郎	一一六	
一六	評論	大死一番		
一七	評論	(大戦後の世界と日本) 徳富蘇峰	一二七	
一七	戯曲	世界の四聖 (樗牛全集) 高山樗牛	一三二	
	勅語	長柄堤の訣別 (桐一葉) 坪内逍遙	一四六	
	語彙・枕詞・形容詞・動詞・副詞		一五六	
	*各課文末の添え文			
三	一九の短歌一首	七 俚諺十句 八 謡曲「高砂」	九	開田耕筆
一四	吉田松陰の文	一五 鶴見祐輔の文		

卷七

一	評論	昭代の餘恵 (男性美) 笹川臨風	四
二	評論	国民文化の理想	
		(神道と日本文化) 清原貞雄	一一
三	評論	国語の愛護	
		(国語の愛護) 五十嵐力	二四
四	評論	牧歌的精神	
		(日本古代文化) 和辻哲郎	三一
五	評論	雄大な気魄	
		(伊東忠太の文) 伊東忠太	四一
六	古文	日本武尊 (古事記)	四八
七	戯曲	入鹿の父 (綺堂戯曲集) 岡本綺堂	五六

八	評論	純ぶる心	
		(佐々木信綱の文) 佐々木信綱	八〇
九	評論	大和国原	
		(上代日本文学史) 武田祐吉	九三
一〇	紀行	正倉院拝観記	
		(文芸と人生) 藤代祐輔	一〇一
一一	紀行	法隆寺 (俳諧一口噺) 高浜虚子	一〇七
一二	評論	聖徳太子 (思想と信仰) 島地大等	一一一
一三	評論	中道を歩む心	
		(中道を歩む心) 鶴見祐輔	一一九
一四	紀行	西の京 (山水百記) 田山花袋	一二七
一五	評論	平安城 (国文学全史) 藤岡作太郎	一三四
一六	評論	二つの典型	
		(古今と新古今) 尾上柴舟	一四八

付録 国文学形態史図表
国文学年表 上

*各課文末の添え文	
一 賀茂真淵、本居宣長、香川景樹、大隈言道、大國隆正の和歌各一首	
二 孝明天皇、平野国臣、梅田雲浜、僧月照、八田知紀の和歌各一首	三
新年祭の一節「延喜式」	四
本居宣長「玉かつま」	五
齋部広成「古語拾遺」	六
弘文天皇御製「懷風藻」	七
日本書紀	八
源実朝、賀茂真淵、梶取魚彦、良寛和尚、橘曙覧、正岡子規の和歌・短歌各一首	九
海犬養岡鷹、作者未詳の和歌各一首	一〇
小野老の和歌一首 芭蕉の俳句二句	一一
笹川臨風の文	一二
高山樗牛「樗牛全集」	一三
金子馬治「欧州思想大観」	一五
「大鏡」	一六
小野篁、藤原敏行、大江千里の和歌各一首	

卷八

一	評論	文体の基調 (五十嵐力の文) 五十嵐力	四
二	古文	月の都 (竹取物語)	一二
三	古文	伊勢物語 (伊勢物語)	二〇
四	評論	永遠の恩恵 (和辻哲郎の文) 和辻哲郎	二七
五	古文	春は曙 (枕草子) 清少納言	三三
六	評論	菅原道真 (樗牛全集) 高山樗牛	三七
七	古文	世継の物語 (大鏡)	四七
八	古文	法成寺の造営 (栄華物語)	五五
九	古文	流泉・啄木 (今昔物語)	六〇
一〇	小説	長谷寺 (二日物語) 幸田露伴	六五
一一	古文	方丈の記 (方丈記) 鴨長明	八五
一二	評論	反省の記録 (文学序説) 土居光知	九三
一三	古文	大原御幸 (平家物語)	一〇四
一四	古文	待賢門の戦 (平治物語)	一一六
一五	戯曲	名残の星月夜 (名残の星月夜) 坪内逍遙	一二七
一六	評論	蘆の若葉 (尾上柴舟の文) 尾上柴舟	一四七
付録	国文学形態史図表		
国文学年表	上		
*各課文末の添え文			
二	和辻哲郎の文	三 島崎藤村「藤村随筆集」	五 紀貫之「土佐日記」
六	竹田出雲「菅原伝授手習鑑」	八 藤岡作太郎の文	九

卷九

一	評論	文学の新生 (久松潜一の文) 久松潜一	四
二	古文	由利八郎の意気 (吾妻鏡)	一四
三	古文	新島守 (増鏡)	二一
四	評論	史論三書 (日本史学史) 清原貞雄	三〇
五	近世	東路の旅 (東関紀行) 源親行	三七
六	評論	愚禿親鸞 (思索と経験) 西田幾多郎	四四
七	古文	良友 (十訓抄)	四八
八	評論	北畠親房 (南北朝時代史) 田中叢成	五三
九	古文	落花の雪 (太平記)	六三
一〇	古文	吉野の軍 (太平記)	六九
一一	古文	四季 (徒然草) 吉田兼好	八〇
一二	評論	謡曲の本質 (新国文学史) 五十嵐力	八四
一三	古文	鉢木 (謡曲集)	八四
一四	古文	入間川 (狂言記)	九七
一五	評論	永徳と山楽 (永徳と山楽) 中井宗太郎	一二三
一六	評論	俳諧の変遷 (俳諧史) 佐々政一	一三七
「剣」、「老鼠」、「早春」(和漢朗詠集) 一〇 西行法師「山家集」一			
一 源平盛衰記 一二「徒然草」一三 高山樗牛「樗牛全集」一			
四 蕪村の俳句三句 一五 源実朝「金槐和歌集」より和歌五首			

付録 国文学形態史図表
国文学年表 下

*各課文末の添え文

- 二 「吾妻鏡」 三 後鳥羽上皇、土御門天皇、順德天皇、慈鎮和尚の和歌各一首 四 慈鎮和尚の長歌 五 阿仏尼「十六夜日記」 六 日蓮「類纂高祖遺文録」 七 「宇治拾遺物語」 八 北畠親房「神皇正統記」 九 「吉野拾遺」 一〇 後醍醐天皇、藤原師賢、後村上天皇、宗良親王の和歌各一首「新葉和歌集」 一一 「閑吟集」 一二 「世阿弥一六部集」 一三 「高砂」 「鶴亀」 「歌謡集」 一四 「建武年間記」 一六 「絵本太閤記」

卷一〇

一 評論 元禄文壇の三偉人

(江戸文学研究) 藤井乙男

四

二 近世 幻住庵記

(森川許六「風俗文選」) 松尾芭蕉

二二

三 近世 馬方三吉 (丹波与作) 近松門左衛門

二七

四 近世 水戸の学風 (大日本史)

三七

五 近世 百虫譜 (鶉衣) 横井也有

四八

六 近世 柳生宗矩 (藩翰譜) 新井白石

五四

七 近世 芳宜園大人の霊を祭る (琴後集) 村田春海

五九

八 近世 芳流園 (南総里見八犬伝) 滝沢馬琴

六三

九 評論 史劇について (逍遙選集) 坪内逍遙

七〇

一〇 評論 ハンニバル (戦時彙報) 矢野龍溪

七九

一一 評論 新しい詩の生誕

(日本現代文学十二講) 高須芳次郎

八八

一二 小説 山路 (草枕) 夏目漱石

九八

一三 小説 高瀬舟 (森鷗外全集) 森鷗外

一二二

一四 評論 春を待ちつゝ、 (春を待ちつゝ) 島崎藤村

一二六

一五 評論 人生の目的 (三宅雪嶺の文) 三宅雪嶺

一三九

一六 評論 文化の威力 (得能文の文) 得能文

一五〇

付録 国文学形態史図表

国文学年表 下

*各課文末の添え文

- 一 山鹿素行「政教要録」 二 鬼貫、涼菟、大祇、蕪村、蓼太、一茶の俳句各一句 三 貝原益軒「楽訓」 四 藤田東湖「述懐」 五 風来山人「六々部集」 六 新井白石「七言絶句」 七 香川景樹、大隈言道、太田垣蓮月の和歌各一首 八 滝沢馬琴「馬琴日記」 九 坪内逍遙「作と評論」 一〇 正岡子規「病床六尺」 一一 西条八十「詩作の傍より」 一二 鳴雪、子規、紅葉、漱石、碧梧桐、虚子、紫影、四方太、瓊音、井泉水、鬼城の俳句各一句 一三 高崎正風、落合直文、正岡子規、佐々木信綱、与謝野晶子、石川啄木の短歌各一首 一四 芳賀矢一「筆のまに／＼」

表5 『国文選』作家と作品一覧 現代文

* ○数字は、巻数を示す。

あ	芥川龍之介「トロッコ」① 芦田恵之助「トロール船より」② 芥川龍之介「蜘蛛の糸」② 饗庭篁村「練馬の名画」④ 芥川龍之介「杜子春」④ 阿部次郎「読書と体験」⑥ 泉鏡花「苺」① 五十嵐力「伊勢参宮」② 五十嵐力「国語の愛護」⑦ 伊東忠太「雄大な気魄」⑦ 五十嵐力「文体の基調」⑧ 五十嵐力「謡曲の本質」⑨ 上田敏「汽車に乗りて」⑤ 荻原井泉水「新緑」① 大和田建樹「千里の春」① 大町桂月「仏浜の月夜」① 落合直文「小品三章」① 小笠原長生「撃沈」③ 大町桂月「田園観興」③ 荻原井泉水「椿落ちて（句評）」④ 尾崎紅葉「塩原」⑤ 大西祝「俚諺論」⑥ 奥田正造「茶境」⑥	い	う	お	き	か	さ	す
	丘浅次郎「物と名との境」⑥ 岡本綺堂「入鹿の父」⑦ 尾上柴舟「二つの典型」⑦ 尾上柴舟「蘆の若葉」⑧ 加藤武雄「墨痕」① 片上伸「マンブリノの兜（翻訳）」② 嘉納治五郎「覚悟」② 金子元臣「川柳点」④ 北原白秋「国境に立ちて」① 木村駿吉「無線電信」② 菊池寛「轡十文字」③ 北原白秋「漁村の秋」③ 菊池寛「亡兆」④ 清原貞雄「国民文化の理想」⑦ 清原貞雄「史論三書」⑨ 久米正雄「競漕」① 久米正雄「銃」③ 窪田空穂「孤島より」③ 国木田独歩「町外れ」③ 厨川白村「米国の半面」⑤ 公報「日本海海戦」① 幸田露伴「雲のいろ／＼」①							
	幸田露伴「伊能忠敬」② 国定読本「野火止の用水」③ 小林一茶「露の世」④ 幸田露伴「雪前雪後」④ 幸田露伴「長谷寺」⑧ 桜井忠温「灯を消して」③ 佐々木信綱「燈火」④ 里見弴「父の思ひ出」④ 笹川臨風「鎮守の森」④ 佐藤春夫「鷺江の月明」⑤ 笹川臨風「昭代の餘恵」⑦ 佐々木信綱「純ぶる心」⑦ 佐々政一「俳諧の変遷」⑨ 島崎藤村「小さな旅人」① 島木赤彦「詩二篇」① 下位春吉「至急電報」① 志賀直哉「山の木と大鋸」② 渋谷玄耳「国引」② 島崎藤村「海の旅」③ 島崎藤村「小諸なる古城のほとり」④ 下村海南「松下村塾を訪ふ」④ 島崎藤村「文章の道」⑤ 島地大等「聖徳太子」⑦							
	島崎藤村「春を待ちつゝ」⑩ 鈴木三重吉「燕」① 薄田泣菫「小話三題」① 薄田泣菫「草の匂」③ 千家元磨「小景」③ 相馬御風「草蛙の紐」⑤ 高浜虚子「静寂」① 田村剛「新高山」① 田山花袋「花影の中に」③ 高山樗牛「日蓮上人」④ 高山樗牛「世界の四聖」⑥ 武田祐吉「大和国原」⑦ 高浜虚子「法隆寺」⑦ 田山花袋「西の京」⑦ 高山樗牛「菅原道真」⑧ 田中叢成「北畠親房」⑨ 高須芳次郎「新しい詩の生誕」⑩ 遅塚麗水「長江湖江記」③ 鶴見祐輔「障子の国」④ 坪内逍遙「長柄堤の訣別」⑥ 鶴見祐輔「中道を歩む心」⑦ 坪内逍遙「名残の星月夜」⑧ 坪内逍遙「史劇について」⑩							

<p>と 徳富蘆花「將軍」① 徳富蘆花「湘南雜筆」② 豊島与志雄「蓮」③ 徳富猪一郎「神国」④ 土井晩翠「出處」⑥ 徳富蘇峰「大死一番」⑥ 土居光知「反省の記録」⑧ 得能文「文化の威力」⑩ 長塚節「蛙」① 永井荷風「リヨンの郊外」① 夏目漱石「噴煙」② 中村正直「否の一語」② 夏目漱石「山路の茶屋」③ 夏目漱石「槌の響」④ 夏目漱石「京の春」⑤ 夏目漱石「倫敦塔」⑥ 中井宗太郎「永徳と山樂」⑨ 夏目漱石「山路」⑩ 西田幾多郎「愚禿親鸞」⑨ の 野口米次郎「白樂天」⑥ は 芳賀矢一「学者の苦心」③ 芳賀矢一「月雪花」⑤ ひ 久松潜一「文学の新生」⑨ ふ 二葉亭四迷「犬ころ」① 藤代祐輔「正倉院拝観記」⑦</p>	<p>ま 藤岡作太郎「平安城」⑦ 藤井乙男「元祿文壇の三偉人」⑩ 松居松翁「桜井駅」② 正岡子規「箱根路」② 正岡子規「小園の記」③ 三宅雪嶺「人生の目的」⑩ も 百田宗治「風景」③ 森鷗外「木精」③ 森鷗外「高瀬舟」⑩ や 柳田国男「海浜の草」② 柳沢健「幼き日」② 山本有三「蚕」③ 山本有三「心の置処」⑤ 矢野龍溪「ハンニバル」⑩ よ 吉村冬彦「凌霄花」① 吉村冬彦「森の絵」② 吉村冬彦「先生への通信」④ 吉江喬松「角笛の声」④ 吉江喬松「南欧の空」⑤ 吉村冬彦「自画像」⑥ わ 若山牧水「廢れたる園」③ 和辻哲郎「樹の根」④ 和辻哲郎「法隆寺の印象」⑥ 和辻哲郎「牧歌的精神」⑦ 和辻哲郎「永遠の恩恵」⑧</p>
<p>上代 古事記「日本武尊」⑦ 中古 竹取物語「月の都」⑧ 伊勢物語「伊勢物語」⑧ 清少納言「春は曙」⑧ 栄華物語「法成寺の造営」⑧ 大鏡「世継の物語」⑧ 今昔物語「流泉・啄木」⑧ 中世 鴨長明「方丈の記」⑧ 平家物語「故郷の花」⑤ 平家物語「有王島下り」⑤ 平家物語「大原御幸」⑧ 平家物語「鎮西八郎」⑤ 平治物語「公卿會議」⑤ 平治物語「待賢門の戦」⑧ 源平盛衰記「鴨遊」⑤ 十訓抄「良友」⑨ 東関紀行「東路の旅」⑨ 北畠親房「人臣の道」⑥ 吉田兼好「徒然草十題」⑥ 「吉田兼好四季」⑨ 吾妻鏡「由利八郎の意気」⑨ 増鏡「おどろのした」⑤</p>	<p>古典 増鏡「新島守」⑨ 太平記「熊野落」⑤ 太平記「落花の雪」⑨ 太平記「吉野の軍」⑨ 御伽草子「一寸法師」② 謡曲集「鉢木」⑨ 狂言記「入間川」⑨ 近世 近松門左衛門「馬方三吉」⑩ 松尾芭蕉「奥の細道」⑥ 松尾芭蕉「幻住庵記」⑩ 新井白石「鬼作左」② 新井白石「柳生宗矩」⑩ 三浦梅園「誠の説」④ 橘南谿「近江聖人」③ 上田秋成「白峰の陵」⑤ 本居宣長「玉かつま抄」⑥ 絵本太閤記「普請奉行」② 横井也有「百虫譜」⑩ 十返舎一九「京見物」⑥ 村田春海「芳宜園大人の霊を祭る」⑩ 滝沢馬琴「芳流園」⑩ 松平定信「四季の雨」④ 「擬古文抄」⑤ 「水戸の学風」⑩</p>

表6 『国文選』作家と作品一覧 古典

表7 垣内松三編『国文選』添え文 目次

*漢数字は文末に添えられた科目番号を示している。

巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七
一 島崎藤村の文 三 新緑の庭（芥川龍之介） 四 尾上柴舟、尾山蔦二郎の短歌各一首 八 俳句三句 子規、碧梧桐、井泉水 九 長塚節の短歌三首 一〇 薄田泣菫の詩 一一 柳田国男の文「沖繩の自然色」 一二 北原白秋の詩 一四 「追憶（二）」石川啄木の短歌四首 一五 「追憶（二）」土岐哀果の短歌二首 文章論（無署名） 一六 虚子、鳴雪、子規の俳句各一句 一八 格言二文 一九 河合醉茗の詩 二〇 吉江孤雁「旅信」 二一 窪田空穂、松村英一、若山牧水の短歌各一首	一 漱石の俳句三句 二 前田夕暮、大田水穂の短歌各一首 三 明治天皇御製	五 木下利玄、石〇千亦の短歌各一首 七 俚諺 一〇 日記抄 沼波珪音 一二 落合直文の短歌各一首 文章論（無署名） 一三 齊藤茂吉、中村憲吉、島木赤彦の短歌各一首 一四 子規、伊藤左千夫、長塚節の短歌各一首 一六 豊臣秀吉、蒲生氏郷、伊達政宗の和歌各一首 一七 格言 一八 「学問の道」貝原益軒 一九 西郷南洲の文 二〇 徳川家康の文 二一 イソップ物語	二〇 大町桂月の短歌一首 一 青々、月斗、則天楼の俳句各一句 三 俚諺 四 加納諸平、佐久良東雄、平野国臣、佐久間象山、久坂玄瑞、野村望東尼の短歌各一首 七 橘南谿の文 八 川柳五句 一〇 大町桂月の文 一二 蕪村の俳句一句 一三 一茶の俳句三句 一四 芳賀矢一の文 一七 大島正徳の文	一 加藤千蔭、村田春海の短歌各一首 二 香川景樹の短歌一首 四 良寛、平賀元義、橘曙覧の短歌各一首 一二 紅葉の俳句一句 一四 保元物語 一六 六樹園飯盛「鐘〇の賛」 一七 村田春海の短歌一首 一八 厨川白村の文	三 一九の短歌一首 七 俚諺十句 八 謡曲「高砂」 九 開田耕筆 一四 吉田松陰の文 一五 鶴見祐輔の文	一 賀茂真淵、本居宣長、香川景樹、大隈言道、大國隆正の和歌各一首 二 孝明天皇、平野国臣、梅田雲浜、僧月照、八田知紀の和歌各一首 三 新年祭の一節「延喜式」 四 本居宣長「玉かつま」 五 齋部広成「古語拾遺」 六 弘文天皇御製「懷風藻」日本書紀 七 源実朝、賀茂真淵、梶取魚彦、良寛和尚、橘曙覧、正岡子規の和歌・短歌各一首 八 海犬養同慶、作者未詳の和歌各一首 九 小野老の和歌一首、芭蕉の俳句二句 一〇 笹川臨風の文 一一 高山樗牛「樗牛全集」 一二

表目次		目次	
巻八	巻九	巻一〇	巻一一
<p>一三 金子馬治「欧州思想大観」</p> <p>一五 「大鏡」</p> <p>一六 小野篁、藤原敏行、大江千里の和歌各一首</p> <p>二 和辻哲郎の文</p> <p>三 島崎藤村「藤村随筆集」</p> <p>五 紀貫之「土佐日記」</p> <p>六 竹田出雲「菅原伝授手習鑑」</p> <p>八 藤岡作太郎の文</p> <p>九 「剣」、「老鼠」、「早春」(和漢朗詠集)</p> <p>一〇 西行法師「山家集」</p> <p>一一 源平盛衰記</p> <p>一二 「徒然草」</p> <p>一三 高山樗牛「樗牛全集」</p> <p>一四 蕪村の俳句三句</p> <p>一五 源実朝「金槐和歌集」より和歌五首</p>	<p>二 「吾妻鏡」</p> <p>三 後鳥羽上皇、土御門天皇、順德天皇、慈鎮和尚の和歌各一首</p> <p>四 慈鎮和尚の長歌</p> <p>五 阿仏尼「十六夜日記」</p> <p>六 日蓮「類纂高祖遺文録」</p> <p>七 「宇治拾遺物語」</p> <p>八 北畠親房「神皇正統記」</p> <p>九 「吉野拾遺」</p>	<p>一〇 後醍醐天皇、藤原師賢、後村上天皇、宗良親王の和歌各一首「新葉和歌集」</p> <p>一一 「閑吟集」</p> <p>一二 「世阿弥二六部集」</p> <p>一三 「高砂」、「鶴亀」(歌謡集)</p> <p>一四 「建武年間記」</p> <p>一六 「絵本太閤記」</p>	<p>一 山鹿素行「政教要録」</p> <p>二 鬼貫、涼菟、大祇、蕪村、蓼太、一茶の俳句各一句</p> <p>三 貝原益軒「楽訓」</p> <p>四 藤田東湖「述懷」</p> <p>五 風来山人「六々部集」</p> <p>六 新井白石「七言絶句」</p> <p>七 香川景樹、大隈言道、太田垣蓮月の和歌各一首</p> <p>八 滝沢馬琴「馬琴日記」</p> <p>九 坪内逍遙「作と評論」</p> <p>一〇 正岡子規「病床六尺」</p> <p>一一 西条八十「詩作の傍より」</p> <p>一二 鳴雪、子規、紅葉、漱石、碧梧桐、虚子、紫影、四方太、瓊音、井泉水、鬼城の俳句各一句</p> <p>一三 高崎正風、落合直文、正岡子規、佐々木信綱、与謝野晶子、石川啄木の短歌各一首</p> <p>一四 芳賀矢一「筆のまに〜」</p>

表8 垣内松三編『国文選』添え文 文種別一覧

「俳句」①俳句三句子規、碧梧桐、井泉水、虚子、鳴雪、子規の俳句各一句、②漱石の俳句三句、③晋風の俳句一句、④青々、月斗、則天楼の俳句各一句、蕪村の俳句一句、一茶の俳句三句、⑤紅葉の俳句一句、⑦芭蕉の俳句二句、⑧蕪村の俳句三句、⑩鬼貫、涼菟、大祇、蕪村、蓼太、一茶の俳句各一句、⑩鳴雪、子規、紅葉、漱石、碧梧桐、虚子、紫影、四方太、瓊音、井泉水、鬼城の俳句各一句

「和歌・長歌」②豊臣秀吉、蒲生氏郷、伊達政宗の和歌各一首、④加納諸平、佐久良東雄、平野国臣、佐久間象山、久坂玄瑞、野村望東尼の短歌各一首、⑤加藤千蔭、村田春海の短歌各一首、香川景樹の短歌一首、良寛、平賀元義、橘曙覧の短歌各一首、村田春海の短歌一首、⑥一九の短歌一首、⑦賀茂真淵、本居宣長、香川景樹、大隈言道、大田隆正の和歌各一首、孝明天皇、平野国臣、梅田雲浜、僧月照、八田知紀の和歌各一首、源実朝、賀茂真淵、樺取魚彦、良寛和尚、橘曙覧の和歌各一首、海犬養岡麿、作者未詳の和歌各一首、小野老の和歌一首、小野篁、藤原敏行、大江千里の和歌各一首、⑧源実朝「金槐和歌集」より和歌五首、⑨後鳥

羽上皇、土御門天皇、順徳天皇、慈鎮和尚の和歌各一首、慈鎮和尚の長歌、⑩香川景樹、大隈言道、太田垣蓮月の和歌各一首

〔短歌〕①尾上柴舟、尾山蔦二郎の短歌各一首、長塚節の短歌三首、「追憶（二）」石川啄木の短歌四首、「追憶（二）」土岐哀果の短歌二首、窪田空穂、松村英一、若山牧水の短歌各一首、②前田夕暮、大田水穂の短歌各一首、明治天皇御製、木下利玄、石〇千亦の短歌各一首、落合直文の短歌各一首、斎藤茂吉、中村憲吉、島木赤彦の短歌各一首、子規、伊藤左千夫、長塚節の短歌各一首、③与謝野寛・晶子の短歌各一首、窪田空穂の短歌二首、若山牧水の短歌一首、大町桂月の短歌一首、⑦正岡子規の短歌一首、⑩高崎正風、落合直文、正岡子規、佐々木信綱、与謝野晶子、石川啄木の短歌各一首

〔詩〕①薄田泣菫の詩、北原白秋の詩、河合醉茗の詩

〔川柳〕④川柳五句

〔格言・俚諺〕①格言一文、②俚諺、格言、③格言、俚諺、④俚諺、⑥俚諺十句、

〔文（古文）〕①吉江孤雁「旅信」、②「学問の道」貝原益軒、徳川家康の文、③中江藤樹の文、山鹿素行の文、④橘南谿の文、⑤保元物語、六樹園飯盛「鐘〇の賛」、

⑥開田耕筆、吉田松陰の文、⑦新年祭の一節「延喜式」、本居宣長「玉かつま」、齋部広成「古語拾遺」、弘文天皇御製「懷風藻」、日本書紀、「大鏡」、⑧紀貫之「土佐日記」、竹田出雲「菅原伝授手習鑑」、西行法師「山家集」、源平盛衰記、「徒然草」、⑨「吾妻鏡」、阿仏尼「十六夜日記」、日蓮「類纂高祖遺文録」、「宇治拾遺物語」、北畠親房「神皇正統記」、「吉野拾遺」、⑩山鹿素行「政教要録」、貝原益軒「楽訓」、藤田東湖「述懷」、風来山人「六々部集」、滝沢馬琴「馬琴日記」

〔文（現代文）〕①島崎藤村、新緑の庭（芥川龍之介）、柳田国男の文「沖繩の自然色」、②日記抄 沼波珪音、西郷南洲の文、③新渡戸稲造の文、④大町桂月の文、芳賀矢一の文、大島正徳の文、⑤厨川白村の文、⑥鶴見祐輔の文、⑦笹川臨風の文、高山樗牛「樗牛全集」、金子馬治「欧州思想大観」⑧和辻哲郎の文、島崎藤村「藤村隨筆集」、藤岡作太郎の文、高山樗牛「樗牛全集」、⑩坪内逍遙「作と評論」、正岡子規「病床六尺」、西条八十「詩作の傍より」、芳賀矢一「筆のまに／＼」

〔漢文〕③白帝城 李白、⑧「剣」、「老鼠」、「早春」（和漢朗詠集）、⑩新井白石「七言絶句」

〔その他〕①文章論（無署名）、②文章論（無署名）、イソップ物語、⑥謡曲「高砂」